

阿部昭集 鶴沼西海岸 未成年 大いなる日 孫むすめ 十年他

河出書房新社

新銳作家叢書——阿部昭集 ©1972

初版印刷——昭和四七年二月二五日 初版発行——昭和四七年二月二九日

定価——六八〇円 装本——杉浦康平 + 中垣信夫 + 海保透 Carpenter Center for the Visual Arts : Cambridge 2742

発行者——中島隆之 発行所——株式会社河出書房新社 東京都千代田区神田小川町三六 電話東京三三二一三二(代) 振替東京〇〇三

本文印刷——晁印刷株式会社 製本——中西製本印刷株式会社

乱丁・落丁本はおとりかえいたしません 0383-534101-0961

幼年詩篇……………5
手……………37

鶴沼西海岸……………63
未成年……………79
大いなる日……………117
おふくろ……………135

孫むすめ……………163
子供のために……………183
十年……………199

日日の友……………217

一日の労苦……………241

短い形式……………272

白いボールの行方坂上弘……………278

年譜……………288

新銳作家叢書——阿部昭集

幼年詩篇

「詩集」——散文の本になら見事な標題だ

ルナー
ル

I 馬糞ばんひろい

勝ちいくさがつづいていて、少年も紙の旗をもって町を
行進した。学校ではお菓子お菓子の配給があった。彼は走って帰
って母さんに見せた。少年の父は遠い軍艦の上軍艦の上にいた。

やがて彼はセロファンセロファンにくるんである乾しバナナにもあ
きてしまった。おやつおやつのたびに乾しバナナだったから。そ
れだけが町のさびれたお菓子屋お菓子屋に売れのこっていた。よく
見ると小さな蛆蛆がわいていることもあった。

皇軍は南洋のゴム園ゴム園も占領したのだ。雪のふる日、少年
はみんなとおそろいの運動靴運動靴をもらって、かじかんだ手
はめて帰ってきた。家の中家の中ではいて、そと廊下を歩いて
みた。

また別の日には、先生が教壇の上からまっ白いゴムまり
をみんな一人一人にほうってくれた。ゴムまりはなんと白

7

かったろう！ 彼は何度もゴムの匂いをかいたので鼻のあ
たまに白い粉がついた。うれしくて壁や天井にもぶつけ
た。ぶつけたところに白いあとがつくのがおもしろくて。
女生徒たちは赤い糸赤い糸であんだ袋をゴムまりに着せて、両
手で包むようにしてあためていた。少年はみんなと外へ
出て、まっ白いゴムまりを春がきた青空へなげた。そし
て、夜は寝るときも手にもって寝た。……

でもそれはずっと昔のことのような気がする。もうおや
つの乾しバナナはどこへ行ってもないし、あのゴムまりも
どこかへやってしまった。一足しかない少年の運動靴には
大きな穴大きな穴があいた。

いまは負けいくさがつづいていて。

またきょうも馬糞ばんひろいだらう、こんなにいいお天気だ
から——朝起きてまずそう考えるところでも愉快だ。馬糞の
匂いにも慣れたし、外へ出られるのがうれしくてしかたが

ない。

たまに雨でもふって作業がないと、めずらしく教室でみんなと声を出して修身の本をよんだりする——

『……太平洋や南の海には、すでに新しい日本の國生みが行はれました。神代の昔、大八洲おほやしまの國生みがあつたと同じやうに、この話は、末長くかたり傳へられるものです。……』

そんなとき、彼は爪のにおいが気になって、指をこっそり鼻さきへ持つて行く。先生は少年のこの変な癖に気がついている。

先生はつぶやく——

「誰だ、指のにおいをかいでいるのは。」

だからこれをやるときは、涙をすすするふりをしたり教科書で顔をかくすようにしてやらないといけない。この癖はもうなおらないかもしれない。少年は馬糞の匂いが好きになつてしまつたのだ。

まえにはどうしてもそれをひろつてあるくのがいやで、学校へ行くのもいやになつたくらいだつた。いまでも夢であわてることがある。

「これしきのもの、手をつかめなくていくさに勝てるとおもうか。——つかめ。」

まっ赤な顔をして、先生が馬糞をわしづかみにしてどこまでも追いかけてくる。

幼年詩篇

少年は必死で逃げて目がさめる。そして、「おかしいな。もういまじゃ平気でつかめるのだ。」とふしぎにおもう。それから念のため蒲団のなかで爪のにおいをかいでみて、安心してねむる。

朝、登校して、きょうも作業だと知らされると、みんなとびあがってよろこぶ。いっせいに小使い室の横のくらん物置小屋へとびこむ。穴のあいてない一番いいモッコをわれさきにとろうとする。穴があると、そこからせっかくあつめた馬糞がみんなこぼれてしまうのだ。モッコはたいいてい葉が腐つていて気持のわるい水がじゅくじゅくしみ出る。

最初のころ、彼はモッコをきたながつてずると地べたをひきずつて歩いていた。すると彼はぶたれた。——大切な農具を粗末にしたというので、彼はいまなら腐つたモッコを頭からすっぽりかぶつてみせることだつてできる。

少年はみんなについて学校の坂を藤沢の銀座通りのほうへまっしぐらにくだつて行く。早く行けばまだほうぼうにあたらしいのが落ちているだろう。馬糞はみんなに人気があるので早い者勝ちだ。それはひろいやすいし、牛の糞みたいにきたない感じがしない。まるでふかしパンのようだ。

みんなの知らない場所に、まだ車にも踏まれていないすてきな馬糞が三つも四つも落ちてしていると少年は心臓がとま

るような気がする。おもわず声をあげそうになる。そして、まだあたたくて彼の手にはいりきらないくらい大きなのを大急ぎで自分のモッコに入れてしまふ。なんだか悪いことをしているみたいに背中がぞくぞくする。

もし何人かで同時にみつけたのだったら、ものすごい奪い合いになるところだ。馬糞がだいじなものも忘れて、蹴ちらしたり相手の胸になげつけたりする。そしてあとでこんなになつた獲物をながめて後悔するのだ。

馬糞がないときはほんとうに困る。水のような牛の糞は吐いたみたいに道路の石にこびりついている。うまくはがれないので、しゃがんで木や竹のへらでけずってとる。時間もかかるし量もすくない。牛の糞はみんなもきらいだ。

馬のものも牛のものも落ちていないとき、少年はずいぶん遠くまで行く。みんなもてんでに好きなほうへさがしに行く。毎日が遠足のようなのだ。たまに荷馬車か牛車を通るとそのあとをつけて行く。彼は二、三人の子と荷馬車のうしろにこっそりぶらさがっていて、馬方にいきなり鞭でぶたれたことがある。

ひろろものがない。どこへ行ってもみんな空のモッコをかかえてうろろしている。このごろ町にはもう馬はいないようだ。元気な馬は徴用で戦地に出されてしまったのだろうし、牛もあまり見かけない。動物の匂いがあるので行ってみると、きたならしい豚がいるだけだ。

こないだ、少年は空っぽのモッコをかついで町をほんやり歩いていて、母さんに会った。

「学校は？」

母さんはびっくりしたような顔をした。彼がサボって町を歩いていると思つたのだ。少年は毎日学校で馬糞ひろいをしていて、母さんにはいわないでいたから。

それは少年が先生にぶたれても家には黙っているのとおなじだ。そういうことは男どうしでなければわからないことなんだ。ほんとうをいうと彼は毎日のようにぶたれている。

「おれにびんたをまともにくらったやつは、そのの（と、先生はゆびさして）壁をつきやぶって廊下の窓から、はるかむこうの満洲国のハルビンまで吹っとなで行ってしまふのだぞ。鉄砲玉のように。——いいか。」

先生は息ができないほどひどく彼をなぐる。先生の手はタバコのおいがする。なぐってからまたタバコをすう。先生は彼をなぐる前やなぐつたあとで、「お前がかわいからなくなるのだ。」といつもいふ。少年はそれをなぜだろうと思つて、痛いのは忘れてしまつても先生の言葉はおぼえている。

町で母さんと会つた日の晩、母さんは彼が「放浪癖」があるのではないかといった。でもまだそのときはそうじゃなかった。

このごろ、少年のかよっている国民学校ではどの学年ももう授業はやらない。四年生は馬糞ひろいのほかに、山のほうの農家へ麦踏みや田んぼの「あんきよはいすい」(暗渠排水)に行く。農家では主人も息子も戦争に行ってしまったので。

少年はみんなと見たすかぎりの麦畑に散らばって、うす暗くなるまではだして足踏みをする。一組から三組まで全部で百五十人くらいいる。百五十人の足でやっても麦畑はひろい。あきて相撲をとったりする。先生がぐるぐる見てまわる。するとみんなはまたおとなしく足踏みをする。先生は、「おい、みんな、景気よく歌でもうたいながらやれ。」という。で、みんなすこし軍歌をうたう。予科練の歌や、ああ堂々の輸送船なんかをうたう。でもじきにやめてしまう。歌をうたうとよけいおながすくから。

作業がおわると、しばらくは歩けない。みんな草の上に倒れていると、その家でふかした小さなイモだんごを一人に三つか四つずつくれる。百五十人分のイモだんごを三時ごろから作りはじめるのだ。——彼はちゃんと知っている。大きなせいろが庭先でさかんに湯気をたてているのが遠くから見える。

彼ははだしのまま、みんなとその辺の地面に坐って、よごれた手でイモだんごをたべる。引率の先生たちも農家の座敷にあがってイモだんごの大きいのをたべている。先生

と農家の人たちがしゃべりながら両方で何度もおじぎをししているのが見える。

彼はその家の井戸ばたで足を洗ってもらって、並んで帰る。農家の人たちは道の上まで出てきて、みんなに、「ありがとよ、ありがとよ。」という。暗くて顔は見えないけれど、そういつている。

少年はおやつをくれるなら毎日でも行ってもいいとおもう。朝、教室の窓の下に整列して出かけるときから、きょう行く家は何をくれるかしら、イモだんごなら一人にいくつくれるだろう、と考えるのは楽しみだ。そして彼がみんなと並んで校庭を出て行くと、昔は運動場だった野菜畑で一、二年の子や女生徒たちが草むしりや石ひろいをしている。

でも空襲があるとその作業もない、朝、出がけに警戒警報が鳴るとしめたと思う。きょう一日何をして過ごそうかと考えて、うきうきとはしゃぐので母さんにうるさがられる。おなががすいたといいに行ってはうるさがられる。

母さんはいう——
「あべれるからおなががすくの。すこしじっとしていら。」

じっとしていても彼のおなかはすくのだ。

学校にいてもいままにサイレンが鳴るのじゃないかとおもって待ちくたびれる。するとかならず鳴るのはふしぎだ。

みんな帰れると思つてすっかり昂奮してしまふ。先生は、「すぐ教室へはいれ。」といつておいて職員室へ走つて行く。みんなは先生が「帰れ。」といいにくるのを待ちきれなくて、机のふたをがたがたいわす。「机のふたを鳴らしたやつは前へ出る。」——先生は怒るけれど、空襲だし、五十人もなぐっているひまはない。

少年はまっすぐ帰るのがなんだかおっくうで、いつも道草をくう。みんなと別れて一人になつてから、よその家の門の石などに坐つてぐずぐずしている。途中でB29に会う。キラキラしてとてもきれいだ。音だけして見えないとおもうと雲のなかから出てくる。B29は銀紙をふらすこともある。艦載機がきたときは別だ。そのときは空から見つからないように塀にそつて走つて帰る。グラマンは子供でも撃つ。

少年の「放浪癖」はたぶんそんなふうにはじめる。休みになるようになってからはじまつた。

夏が近づいたある日、彼がおもてへ出てみると、近所にいる『服部』という六年生の子がよその家の垣根の根もとを手でしきりに掘っていた。その穴へ服部はあやしい封筒のようなものをかくして、砂をかぶせた。そしてひょいとうしろを見ると少年が立っていたのだ。

少年がむこうへ行こうとすると、服部はよびとめた。埋

めた物をあわてて掘りおこしていた。

「やるからしゃべるな。」

服部は袋の中からお金を一とつかみ出して彼にうけとらせた。

彼が黙っていると、相手はまた穴を掘りながら、これは自分の組の一月分の学級費を先生の戸棚からかっぱらつてきたのだといった。そして、それを使ってしまつたら白分にいうといい、またやるから、といつてさかんに手で土をならした。ほかにまだまだあちこちの家の竹垣のすきまとか樹のうろなんかに少しづつ分けてかくしてあるけれどそれはひみつだ。……

少年はおどろいてもがいえなかつた。服部はいつも組長をしている模範生で先生たちに信用のある子だったから。

彼はとにかく黙つていることを約束したけれど、お金は使いみちがないのでかぞえもしないで自分の家の垣根の下に埋めた。しばらくのあいだ彼はお金をそこへ埋めたことも忘れていたくらいだった。

ある日、ふと思ひ出して、あれを使つてみたらと考えた。

少年は土の中から砂まぶれのしめったお札と銅貨をほり出して、駄菓子屋へ行った。店の中を見まわしてもおなかの足しになるようなものは何もなかった。それでも彼は砂

糖をまぶした食パンの耳だのコンブだのイカの足だのをつきつぎとたべ、細いガラスの管にはいった赤い寒天のようなものを何本も店先で吸った。そして一通りたべてしまふと、今度は蠟石やビー玉で半ズボンのポケットをふくらました。最後にまともてお札で払った。すると、お釣りがびつくりするほどきたので、はじめてすごい大金をもっていることがわかった。

しかしその日はもう欲しいものもなかったので、残りのお金はまたもとの場所へ埋めた。

そのうち服部は、少年にも彼の組の学級費を盗み出したらどうか、とすすめた。それをやるのは先生がみんなから学級費をあつめた日の放課後でないとだめだ。どの先生もたいていあつめたお金をひとまとめにして一日ふつかは机の引き出しやうしろの戸棚にしまっておく。その日にお金を忘れる子もいて全部は集まらないからだ。鍵はかかっていることが多い。服部は、自分は校長室にもしのびこんだことがある、といった。だけど校長室には盗るものがない。あった。

少年は一度だけそのつもりで放課後の教室へ行ってみた。戸棚にはちゃんと鍵がかかっていたし、先生の机には大したものはいっていなかった。授業中に誰かが見つけて取りあげられたバチンコとかペーゴマなんかが入れているだけだった。——彼は忘れ物があるような顔をして、

がらんとした教室へわざと大きな足音をさせては行って行ったのだ。その空気はなまぬるくて、ほこりくさかった。作業や空襲で教室はもうめったに使わなかったから。黒板には先生の字でずっと前の日付と曜日を書いてあった。みんなの机にもあついほこりがたまっていて、さわると指のあとがはつきりのこった。彼は先生になつたつもりで教壇の上から自分の席のほうをちょっと見おろして、それから出てきた。

少年はなんとなくあのお金をはやく使ってしまったわけばいけないような気持がしていた。そこでむりにでも使おうとしてほうぼうの店へ行ってみた。非常時で売る品物がないのでどこの店も商売をやめて店先を物置きがわりにしていた。

彼は一軒のさびれた文房具屋へはいつて行った。そして売れのこっている古い品物を見ているうちに急にインクの吸取紙がほしくなり、それを幾束も買った。けれども店を出てから吸取紙は全然使いみちがないことがわかった。で、そんなものを山のように買ったのがいやになって、全部束をほどいて溝に捨てた。

少年は買い物にはくたびれてしまった。そんなある日、彼はこのお金でどこかへ行こうと思いついた。

朝起きるとすばらしい夏の天気なので、彼は電車で鎌倉へ行くことにした。ひとつは海のふちを走る電車に乗って

みたいのと、大人の話をきいて鎌倉にはいろいろ見物するものがあるような気がせんからしていたからだ。

彼はその計画に近所の養鶏所の『高橋』という子をさそつた。学校へ行く途中、彼はお金をみせびらかして、「いっしょにすれば分けてやるのに。」といつてみた。高橋はおとなしいウサギのような子なので、彼はしまいにはおどかすような口をきいた。

高橋は長いことぐずぐずしていて、けつきよく、行くのはよす、といった。彼は腹を立てて、それならば自分がサボることを黙っている、といった。先生はきつと彼の家のいちばん近くにいる高橋に自分のことをたずねるかもしれないから、そうしたら知らないといえ、といった。

高橋が絶対にいわないと誓って一人で学校のほうへ歩いて行ってしまつてから、少年はとて後悔した。高橋のやつは先生におどかさればきつとしゃべつてしまふだろうと思つた。

でも天気はいいし、彼は電車で海を見ながら鎌倉へ行く計画だけは思いきることができなかった。彼はかまわず鶴沼の駅へといそいだ。

改札口の横にしばらく前から空き家になつてゐる売店の小屋がある。裏口の戸がこわれているのでこっそり中へはいつた。暗くてクモの巣だらけだつたけれど、羽目板のすきまから日がさすので、天井の近くにある一番高い棚によ

じのぼつて、そこへ防空頭巾とカバンをかくした。それから、ふかしイモの弁当包みだけを脇にかかえて鎌倉行きの切符を買い、電車に乗つた。

学校がはじまる時刻は過ぎていたので電車はすいていた。大人ばかりだつた。初めての計画に少年はすっかり昂奮していたから、しばらくはそわそわして外の景色も目にはいらなかつた。

藤沢の町から遠ざかるにつれて落ちついてきた。やっぱり一人で来てよかつたと思つた。少年はまえからこの小さな電車を好きでならなかつたのに、乗る機会は一年に何回もなかつたのだ。なぜ好きかという、この電車は東京の市内電車のように、パンタグラフではなくポールではしる。単線なので上りと下りの電車が中間の駅で待ち合せてすれちがう。そのとき両方の運転手が窓から首を出して革のカバンのようなものを交換するのがおもしろい。線路には草が生えている。名前のわからない小さな花が咲いているのもある。ときどき犬や猫が馬鹿にしたようにゆうゆうと前をよこぎる。

少年は運転手の背中からはなれないようにしていた。

海へ出る前に腰越の漁師町を通つた。そこには蠅がたくさんいた。いやな臭いがしていた。海藻のおいと、魚のはらわたが日にあたって腐つてゐるにおいとがまじつてした。その駅からは魚くさい股引ハカマをはいたじじいやうるさ

く泣く赤ん坊をおぶったおかみさんが乗った。

とうとう海へ出た。電車は崖のふちを走った。海はずつと沖のほうまで見わたせた。

波のない海面に口で吹きよせたようなこまかい皺がいちめんんできて、キラキラとまぶしいくらいに光っていた。

砂浜には水色のペンキがはげた納涼電車の車体がりもれていた。屋根には蒲団や洗濯物が干してあった。——ずつとむかし戦争がなかったじぶん、夏になるとそういう電車が走ったのだ。夜、ゆかたを着てみんなで花火を見に行つたわ、と母さんが話したことがある。

少年は下駄をぬいで窓から海を見ていた。

するとすぐ隣りで、モンペをはいた女の人がふたり、彼のほうを見ながら話をしているのが目にはいった。

彼はきき耳をたてた。自分のことを話しているんじゃないかという気がしたのだ。——

「たくの息子も、何と申しますか、犬鼻だもんですから鼻の通りがわるうございましてね。それで一度思いきって手術をしていたらと、主人も申しますものですから、……」

「鼻の病気はねえ、なかなかむずかしゆうございませうからねえ、……」

「おたくのお坊っちゃまは、……」

そんなことを何回でもくどくどとしゃべっていた。

幼年詩篇

その二人とも国民学校に行っている男の子がいて、その子の鼻が悪いので物おぼえがにぶく学校でもできないから困るといふ話らしかった。

いやなばあたち！ 少年は、自分のことが目にはいったもんで二人が子供の話なんかしだしたのだと思った。そして急に居心地が悪くなった。「学校」とか「先生」とかいう言葉が出てくるとおもわず耳をすました。どこの学校だろうと思った。

そうして電車が海のふちをのろのろと走っているとき、いきなり空襲警報のサイレンが鳴った。

その朝はまだ警戒警報も出ていなかったもので、乗っていた大人たちはみんなあわてた。これは艦載機がきたのかもしれない。

少年は少年であわてていた。ここで死にでもしたら自分がどこの学校の生徒であるかわかってしまうし、サボってこんなところにいたこともばれてしまう！

女の車掌がさげんでいた——

「おりて松林の中へ退避してください！」

すると、さっきの女の人の一人のほうに少年がうろろろしているのを見つけて、たずねた——

「あなたはどこの学校？」

少年は正直にこたえた——

「お母さんのお使いで鎌倉まで行く。」